

株式会社サン薬局 在宅薬物治療支援部

(神奈川県横浜市・横須賀市)

薬剤師にしかできない
薬物治療の支援を実践し
患者さんや他職種の信頼を得る



質と信頼関係を重視した 在宅緩和医療を提供

横浜市内を中心に12店舗を展開する株式会社サン薬局（奈良秀一代表取締役社長）が、在宅医療に本格的に取り組むことを目的に「在宅薬物治療支援部」を新設したのは2012年のことだ。そのきっかけは在宅薬物治療支援部部長の奈良 健さんが日本在宅薬学会理事長である狭間研至氏の主催するバイタルサイン講習会に参加したことだった。「狭間先生から『バイタルサインを取ることが目的ではありません。在宅医療の現場で薬剤師にしかできないことを実践するため、すなわち薬物治療をサポートするための1つのツールとして、この技術を身につけるのです』と説明されたとき、在宅医療の場こそ、これから薬局が地域の中でやりがいを持って働ける現場の一つになると確信し、社長とともに参入することを決意しました」と奈良さんは振り返る。

ただ、在宅医療といっても現在行われている薬局の活動内容には温度差がある。医師や看護師、介護職と連携することなく、医薬品や医療材料を自宅に届けることで在宅医療が完結している薬局も少なくないのが現実だ。しかし、奈良さんが目標とする在宅医療とは「薬剤師として他職種と連携しながら薬物治療をサポートすることによって患者さんや家族を幸せにする」ということに尽きる。また、医療用麻薬をはじめとする様々な薬剤の適切迅速な使用と、その評価をするために薬剤師の職能がとくに発揮できる在宅緩和医療については「患者さんがその寿命を全うできるよう全力を尽くす」ことを目指す。

初心で掲げたこれらの目標を忘れないように、奈良さんは在宅医療を統括する部署名にあえて「薬物治療支援」という言葉を入れて、そのクオリティーにもこだわってきた。早急に、できるだけ多くの店舗で在宅医療に取り組み、調剤報酬を少しでも稼ぐのが薬局の経営戦略としては正しいのかもしれませんが、在宅医療は患者さんや家族、他職種との信頼関係がすべてといっても過言ではない分野なので、ビジネスライクに割り切ると失敗します。私と同じ志を持ち、同レベルの支援ができる薬剤師が育った店舗から順次、在宅医療に

取り組んでいます」と奈良さん。そのため、2016年1月現在、在宅医療に取り組んでいるのは、グループ12店舗中、サン薬局港南台駅前店（横浜市港南区）、サン薬局いずみ野店（横浜市泉区）、すずらん薬局（横浜市港南区）、キッズ薬局（横浜市南区）、日の出薬局（横須賀市）の5店舗となっている。

3つのステップに分けて 薬剤師の役割を整理する

奈良さんは現在、日の出薬局を中心に在宅医療業務に従事する。「在宅緩和医療における薬剤師の重要な役割には3つのステップがあります」と奈良さんは示唆する。最初のステップは、医療用麻薬を含む、痛み止めなど疼痛緩和を中心とする薬剤を手配し、すみやかに配達することだ。そして、患者さん本人やご家族、介護者や訪問看護師さんに対して、お持ちした薬剤の使い方をしっかり指導することが次の2つめのステップとなる。

「独居、老々介護など介護の背景は一人ひとり異なるため、その患者さんや家族に応じてカスタマイズした方法を用いることが大切です」と奈良さんは言う。それには患者さんや家族の生活状況を正しく把握することが必要となり、その情報を得るためには主にケアマネジャーとの話し合いが欠かせない。さらに「病院のように医療者が投与するのではない」ということを念頭において使い方の手順を紙に書いて持って行ったり、実際に介護者が使っている様子を確認して指導したりするなどきめ細かいサービスを心がける。

最後の3つめのステップとして、奈良さんは、専門家として薬物治療を支援することを挙げる。「薬剤師にしかできない薬物治療の支援とは何か——。この問いを追求すると、薬剤のアセスメントにたどりつきます。すなわち、薬剤が投与された結果を評価し、問題が解決されていない場合は根拠を示したうえで次の処方積極的に提案することが薬剤師に与えられた大事な役割です」と奈良さんは言い切る。この役割を十分に果たすためには、やはり患者さんの状態を正しく把握することが必要で、それには患者さんの自宅に足を運び、介護する家族や訪問看護師さん、ヘルパーさんと緊密に連絡を取り合い、自分で患者さんの情報を収集することが非常に有効だ。



奈良健さんは「自宅で過ごすことを選んだ患者さんや家族に決して後悔させたくない」という一心で在宅緩和医療に取り組んでいるだけに「最後に家に帰れてよかった」と言っ
て喜んでもらえることが何よりの励みになる



“線”で眺めることのできる在宅緩和医療を行うためには自分から情報を集めることが肝心だ。処方提案の根拠を得るために必要があれば積極的にバイタルサインも取る



在宅薬物治療支援部の事務室。一般社団法人日本在宅薬学会のエヴァンジェリストを務める奈良さんは、ここから志をともにする全国各地の薬剤師に向けて情報発信も行っている

サン薬局グループでは、質を担保するために奈良さんが薬物治療をサポートできると認めた薬剤師しか在宅緩和医療を行っていない。最新のがん薬物治療に対応できるように薬局内でのカンファレンスも定期的に行っている



また、奈良さんは薬剤師が3つめの役割を果たすうえで「患者さんの辛い症状を目の当たりにすることが大事です」とも示唆する。例えば、がんの痛みに七転八倒する患者さんを見れば、痛み止めのベース薬が効くまで放置しておいてもいいのかと自問自答し、主治医にレスキュー薬の提案をせずにはいられなくなる。「薬局の中で待っているだけでは、到底このような行動には及ばないと思うのです」（奈良さん）。

奈良さんは、この3つのステップの役割を常に果たすことを心がける一方で、相手のニーズを探り、そのとき求められることに対して的確に対処することにも腐心する。「患者さんの生活や人生を支える在宅緩和医療の現場では、様々なニーズが出てきます。チーム医療の一員として協力できるよう『薬剤師だからアセスメントさせてもらえる薬物治療のサポートしかやりません』と頭でっかちにならないように気をつけています」（奈良さん）。

目的を共有することが 他職種連携のベースをつくる

そして、薬剤が関わることも少なくない看取りに関しては「ときにはシビアな判断が問われる場面に遭遇することもあり、生半可な気持ちではサポートできません」と奈良さんは打ち明ける。看取りの場面に医療者として向き合うためには、「日頃から患者さんや家族と“点”ではなく“線”でつながっておくことが大切です」と奈良さんは示唆する。つまり、患者さんが医療機関に入院そして退院してから今日までどのような経過をたどってきたのかをわかっていないと患者さんや家族の信頼を得ることも、死に対する価値観を理解することもできないため、看取りにきちんと関われないという。

患者さんや家族が在宅緩和医療を始めると決めた時点から関われるように、奈良さんは医療機関が開く退院時カンファレンスには可能な限り参加している。というのも、カンファレンスの場で互いに情報を提供し合い、患者さんのために必要なサポートを討議することによって、患者さんとその家族を支えるあらゆる立場の職種が目的を共有することができるからだ。そ

して、この目的共有こそが他職種連携の強固な基盤をつくっていくため、カンファレンスの場への参加は欠かせない。

状況によっては、薬局薬剤師は退院時カンファレンスの場に呼ばれず、後から薬物治療のサポートを依頼されることもある。このような場合、医療機関のスタッフに「そちらに向かうので患者さんが病棟で使用した薬剤とこれまでの経過をすべて教えてほしい。できれば患者さんと家族にも合わせてください」と頼んだこともある。「命に限りのある患者さんだからこそ、周到的な準備を行い、迅速に対応してあげたいと考える。この気持ちは、医療機関のスタッフにも共通するものなので、こちらの思いは確実に相手に伝わり、こうした申し出が拒否されることはほとんどありません。このときは時間外にもかかわらず、医師、看護師、薬剤師が揃って待っていてくれました」と奈良さんはエピソードを披露する。

そして、1薬局の取り組みでは多くのがん患者さんの最後を支えることに限りがあることを痛感する奈良さんは、地域で活動する薬局薬剤師に在宅緩和医療への参入を呼びかける。「かかりつけ薬局だと頼りにしていた薬局に断わられて自宅に帰りたいくても帰れない患者さんが大勢いることにどうか目を向けてほしい。麻薬の処方箋を扱えないから、あるいは注射薬や輸液の調製を行える設備がないからといった薬局の都合を優先して考えるのではなく、私たちがまず考えるべきは患者さんや家族の都合です。できない理由ではなく、なんとかしてできる方法を考えていくことが大切だと思うのです」と――。

また、奈良さんは在宅緩和医療に取り組んだことによって薬剤師としての自信と生きがいを取り戻したとも語る。「患者さんや家族はもちろんのこと、『奈良さんのおかげで助かったよ』と医療機関のスタッフからも感謝される。こんなに薬局薬剤師が望まれている場はありません」。自分たちが活動することによって社会が変わっていく手応えも感じ始めている奈良さんは自分が培ってきたノウハウをサン薬局メソッドとして普及し、社内をはじめ、地域にも在宅緩和医療に取り組む仲間を広げていきたいと考えている。